

はじめに―なぜ、今「楽しく深い学び」の創造なのか―

愛知教育大学教職大学院・佐藤洋一

1、二〇三〇年、二〇四五年…を見据えて

すべての見えるものは見えないものに触っている
すべての聞こえないものは聞こえるものに触っている
すべての感じられるものは、感じられないものに触っている
そしておそらく
すべての考えられるものは考えられないものに触っている

(ノヴァーリス「断章」より)

わずか二九歳、肺結核で夭折したドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリス(一七七二―一八〇一)は、未完の小説『青い花』や永遠の女性ゾフィーとの恋と喪失、ゲーテ『ヴェルヘルム・マイスターの修行時代』(一九七六)への批評的立場等から日本でも知られている。

ノヴァーリスのこの言葉は、初期ロマン派の単に夢想がちな若き詩人の想像を語っているのではない。フロイトやユングによって無意識・深層心理が発見される一〇〇年も前に夢想や感覚、無意識等の「現実を超えたもう一つの世界」世界の「真実・深層」の意味、いわば“自分が自分であり続けるための”世界認識の一方法を断章として語ったものと私は解釈している。換言すると、人間の想像力・創造力こそが生と関係の存在証明(真実)とも読むことができる。

この言葉を例えれば、大岡信は「言葉の力・詩と真実」を語るなかで引用している(『言葉の力』)。いわゆる近代芸術(文学)の限界を示した二〇世紀(現代)芸術運動一つ、シュルレアリスムの思想と方法から詩人として出発した大岡信らしいということが出来る。

新学習指導要領における「資質・能力」重視や「OECD二〇三〇」^①、シンギュラリティ(技術的特異点・二〇四五年)等への視野も含めて考えれば、想像力⇨創造力・批評的リテラシーにつながるものであり、非認知的スキルやリジリエンスともいうことができる。

2、「見えないもの…」を見続ける人間的な想像力・創造力

すべての「見えないもの・聞こえないもの・感じられないもの」、そして「考えられないもの」は、ある意味では教育における子ども達の真実、教育の本当の深み…とみる事ができるかもしれない。それらの多くはノヴァーリスが語ったように「見えるもの・聞こえるもの・感じられるもの・考えられるもの」に触っている。

そして、この二つをつなぐものは何か…、二つを見続ける主体の確かさ…、洞察力の深さや本質性こそが重要である。教師になって三八年。私は本当に生徒達や彼らの言葉、その奥にあるもの、希望や祈り…を見てきたのか、聞いてきたのか、考えてきたのか。「おまえは一体何者なのか、何ができてきているのか、何のためにここにいるのか」。生徒達の前でいつも、いつも…自問をし続けてきた。

高校教師になったばかりの初任の数年間、授業や学級経営、生徒指導、部活動等がうまくできない自分の無能さと力量の無さを誤魔化し、時に生徒達のせいにしてきた時期もあった。実は自分の無能さ、無力さを恥じながらもがいていた。大事な現場に役立つ知識や技術の蓄積か、専門的・学術的な知見か、生徒達の哀しみや痛みにも向き合い、寄り添う想像力か…。今も迷いながらである。

3、楽しく深い授業・確かな教育の創造

楽しくあたたかく、ユーモアで皆の笑顔が包まれる授業や教室。深く本質的で、世界や人間の真実・秘密に「触れている」教育。何より、確かで本質的な洞察力に裏付けられた教育。

生きる勇氣と自信、方法を与えるような楽しい授業をめざしたい。

今年度、御縁があり森和久先生(椋山女学園大学教授)と研究会を持つことができました。年四回と回数はいく少なく、ささやかな研究会でしたが諸先生方との素敵な出会い、楽しい協議ができました。研究誌刊行に際し、改めて感謝と御礼を申し上げます。